

## 明治時代の水着の復元を通してみた校祖・ 渡邊辰五郎の洋装教育

山田 民子\*・寺田 恭子\*\*・柏原 智恵子\*・富澤 亜里沙\*\*

A Study on the Western Clothes Education of Tatsugoro Watanabe  
who Passes Restoration of Bathing Suit at the Meiji Era

Tamiko YAMADA, Kyoko TERADA, Chieko KASHIWABARA, Arisa TOMIZAWA

### 1. はじめに

大磯町郷土資料館の夏の企画展・東京中のしゃれた奴らがやってきた『元祖海水浴場・大磯』に明治時代の実物大の海水浴着を展示したいとの依頼を受けて男女2点の海水浴着を作成した。

大磯は明治時代以降、歴史的に海水浴場として名を馳せ、明治の著名人が別荘を建て発展してきた経緯があるとのことは、企画展のテーマからも想像できる。

明治43年裁縫教科書『渡邊裁縫講義』に海水浴着の作図が掲載されており、また、家政大学の博物館にはこの海水浴着の雛形（重要有形民俗文化財）が保管されていることから、実物大の製作を求めてきたものだ。

著者らは、この海水浴着の製作を通して、雛形教育を考案した校祖・渡邊辰五郎の教育に対する熱意を再確認した。

裁縫雛形は、明治から昭和にかけて、東京家政大学の前身である『和洋裁縫伝習所』（明治14年創立）、『東京裁縫女学校』『東京女子専門学校』の教育課程の中で制作された、衣服や生活用品等のミニチュアサイズの標本である。雛形教育の目的は、最小の時間、労力、費用で最大の学習効果を上げさせるというもので、学生の教育の充実を求めたものである。また、雛形を作成するために『雛形尺』を考案した渡邊辰五郎の裁縫教育は大きな特徴となっている。

また、まだ和装中心の生活であった時代に次代を想定しての洋服の教育等、近代社会における裁縫教育の指導者育成を十分に意識した教育内容になっていたと感じ取れた。時代の最先端を行く画期的な教育であった。また雛形の縫製は、省略することなく実物と同じ手法で作成されていた<sup>1)</sup>。

実物大のセーラーカラーの海水浴着は、渡邊辰五郎の遺稿をまとめた、『渡邊裁縫講義 高等部』（渡邊滋編、明治43年）に掲載されている製図をもとに作図をし、縫製については雛形を参考に完成させた。製作した海水浴着は、泳ぐための水着ではなく大きめの帽子をかぶって浜辺を散歩する

---

\*服飾美術学科 服飾造形第2研究室 \*\*服飾美術学科 服飾造形第1研究室

というようなリゾートウェア・ビーチドレスのようであった。写真1からも当時の着用されていた様子が理解できた。しかし、素材はキャラコで水が付くと透けてしまう生地のため、コルセットの上に着用するようにデザインされていたのではないかと想像した。文献にも『コルセットの上に着用するようにデザインされていた服は、泳ぐためではなく水に浸る（水浴する）ためだった』<sup>2)</sup>と記述されたものがあった。

実物大の製作を通して理解できたことは、雛形とのシルエットの違いであった。雛形教育は、縫製方法については十分な情報を含んでいるが、シルエットは縮小サイズのため実物の形状とは、大きく異なるものであった。明治時代の海水浴着が、現代にも通じるファッション性のあるものであったことは、製作した実物大の海水浴着から想像することができた。本報では、海水浴着の製作を通して水着が導入された経緯や、雛形教育に取り入れられた洋装教育の経緯を解明することを目的とした。

## 2. 海水浴着の復元

出来上がり図を図1に示す<sup>3)</sup>。

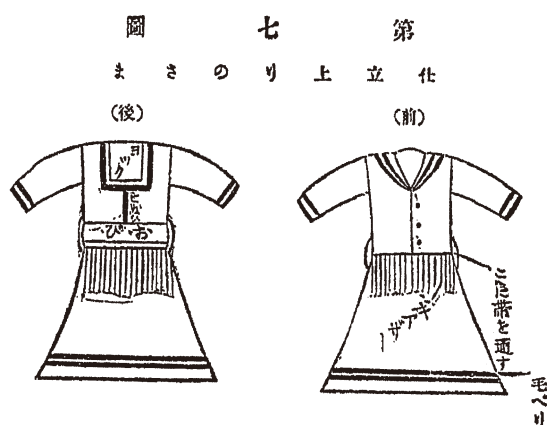


図 1



明治40年頃のツーピース水着の女性  
写真 1 (竹永紋子氏所蔵)

『日本の海水浴関連年表』<sup>4)</sup>によると、1161年愛知県の大野浦が、世界最古の海水浴場と伝承されている。松本順により神奈川県大磯照ヶ崎海岸に海水浴場が開設されたのは、1885年であるが、それまでの海水浴は療法的な意味合いが強かったのに対し、遊楽を一般化させたようであった。しかし、1890年に登場した女性用の水着の姿は、西洋寝巻とか看護婦服と呼ばれていたもので、泳ぐための水着では無かったと想像できた。その後1907年に、メリヤス編みの太い横縞模様のシマウマ水着が登場した。丸衿で細い半袖の上下がつなぎとなった形で、身体にぴったりフィットするものであり、脚部が二股に分かれていて、裾も膝上までの短い丈となり、泳ぐ上でも身体に纏わりつくことがなく、水に入ったり泳いだりすることを念頭に置いた、水着の原型といえるものが登場している。腹囲には、布を帯のように巻くのが流行ったとのことであった。写真2に示す。しかし、

一般にはかなり大胆な、水着姿と映ったようで、控えめな女性や保守的な女性は、依然として従来の全身を隠すような水着を着用していたようであった。1912年になると、青く細い縦縞や格子、碧と青の横縞、水玉模様などの水着が登場している<sup>4)</sup>。

このような時代背景の中で、おしゃれ感覚のあるセーラーカラーの水着は、どのように誕生したのか、興味がわいた。

セーラー服は、日本では女子中高生の制服のイメージとして定着しているが、セーラー服の歴史は古く1600年代にイギリス海軍の水兵服として誕生し、そのあと、多くのデザイナーによって『ファッション着』としてデザイン化されて来たものである。

衿の形状は、後頭部から耳部分に掛けてぴったりと立てて着装することによって、『パラボラ集音』の原理で遠くの音が聴き易くなるという軍服らしい実用的なデザインから来ているようである。

またオーバースカートに用いられているギャザースカートの歴史も古く1830年代以来流行している<sup>5)</sup>。

20世紀初頭より、社会の変革に伴い女性の地位及び役割が変化するが、女性のファッションも劇的な変容を遂げた。女性服に大きな影響を与えたのは、スポーツウェアだった。スポーツウェアの持つ快適性や、機能性はズボンの着用や、コルセットの排除といった女性服の変革を促した。

スポーツウェアは、乗馬などの特定の運動を行うためにつくられた服であり、19世紀後半上流階級の特権的な楽しみであった乗馬が一般市民にも広がり始めた。女性が馬にまたがることは認められていなかったため、女性の正式な乗馬スタイルは、スカート着用の上での横乗りであった。しかし実際は、安全性や機能性から男性と同じようなパンツとブーツが着用されたが、それを覆い隠すように必ずスカートが着用された<sup>2)</sup>。

1870年ころにアメリカで製作された子供用水浴着<sup>2)</sup>を写真3に示すが、大人の服のデザインをそのまま縮小したものではなく、子供の体型やライフスタイルに合った子供用のデザインとして初めて製作されたものであった。一方、当時の大人は水浴着として、膝丈のスカートの下に丈の長いパンツをはいていたようである。女性の身体に対する考え方が保守的だったことを反映している。

今回製作した海水浴着は、男女ともに上下続きの同じパターンを用い、女性用はウエストにギャザースカートを縫い付けた。このことは、乗馬服やアメリカにおける当時の水着と同様の考え方が反映されていると推測できた。

1870年フランスにおいてレドファン女性用スポーツウェアが製作され、英国では、女子用パブリック・スクールに体育が取り入れられた。日本では、1906年（明治38年）、井口あくりによりセーラー服とブルマー型パンタロンの体操服導入提案が示され、一部の先進的な女子教育機関で受け入れ女子体育論ブームがおこるが、普及されなかったようであった<sup>2)</sup>。

洋服の歴史が長い欧米においては、セーラーカラーもギャザースカートもすでに着用されていたが、まだ和装中心の日本に洋装教育・海水浴着を取り入れたことは、画期的なことであった。



写真 2 (川村恭子氏所蔵)



写真 3

スポーツウェアは、欧米女性の地位を大きく変えた文化であることから、校祖・渡邊辰五郎も日本女性の地位を向上させることを考えたと推測できる。女性の価値を主に子供を産み、育てる役割に見出していた社会から、女性の地位を向上させるためには、学問を付けることと考え、指導できる指導者の育成に目的をおいたと考えられた。さらに、洋装の時代が到来することを想定して洋装教育を取り入れ、どのようなものを注文されても縫えるようにと、雛形教育を考え出したのではないかと考えられた。

次に海水浴着の仕立て方・採寸・裁ち方・しるしのつけ方等の解説文を示すが、明治43年裁縫教科書『渡邊裁縫講義』の表現に近付けたものを記述した<sup>3)</sup>。

( ) の中は、単位cmで示した。

## 2.1 仕立て方

### 2.1.1 用布の見つもり方

2尺幅 (75.8cm) の裳を使用

身の丈：2尺7寸 (102.3cm) の2倍 5尺4寸 (204.6cm)

袖 丈：7寸 (26.5cm) の2倍 1尺4寸 (53cm)

カラーの丈：9寸5分 (36cm)

裳の丈：2尺幅 (75.8cm)、長さ5尺 (189.4cm)

必要な総丈：1丈2尺7寸5分 (483cm)

### 2.1.2 採寸

第1に身の丈を取り、仕立てるときにこの取った寸法より78寸 (29.5cm) くらい短く裁つ。

腰の周りの寸法、頸まわりの寸法を取る。

股の止まりより下の丈を計って股下とする。その箇所で、足の太さを測る。

海水浴着であるので、丈と腰まわりの太さを知れば良く、洋服のようにきちんと合うのを必要とせず、緩やかに仕立てる。

### 2.1.3 地質

白キャラコ、白天竺、金巾、木綿縮

復元には、白キャラコを用いた。

#### 2.1.4 裁ち方

総尺の中より幅1尺6寸（60.6cm）、長さ2尺7寸（102.3cm）を1枚取り、中表に幅を2つ折りにする（図2－第1図）。

幅8寸（30.3cm）

前身幅は、腰周り太さの1/4に1寸（3.8cm）加える。

股下止まりにおいては、それより1寸（3.8cm）広くする。

（故に）腰まわり：2尺4寸（90.9cm）となる。

前幅：2尺4寸/4（6寸 22.7cm）+1寸（3.8cm）7寸（26.5cm）

股下止まり：前幅より1寸（3.8cm）広くする 8寸（30.3cm）

#### 2.1.5 しるしのつけ方

##### 2.1.5.1 前布（図2－第一図）

図2－第1図のように布を置く、左右の端にて自分の向うより手前に丈2尺（75.8cm）の所に標をつける。この位置にて、左の端より右に幅を1寸（3.8cm）、丈2尺（75.8cm）の所までまっすぐに取り、標をつける。

幅1寸（3.8cm）の隅より、丈5寸（18.9cm）上の間は、丸みを付けて描く。丈2尺（75.8cm）の所は、幅いっぱい描く。股上には、ズボン下等のごとくに形をつける。丈5寸（18.9cm）の間、標の通り切る。その止まりより、縫い代を丈2.3分（8.7cm）残して、左の方へ丸みを付け、切り取る。

自分の前にて、右より左へ幅6寸5分（24.6cm）と標をする。その標より左の方は、丈2尺（75.8cm）のところにおいて、幅いっぱいの所から股下を斜めに標を付け、標通りに裁ち落とす。

自分の向こうにて左より右へ見返し幅1寸（3.8cm）取った所より、右へ衿肩を2寸（7.6cm）取り標をする。顎も2寸（7.6cm）とし、衿肩から顎まで図の通り標をする。

衿肩2寸の所より右へ肩幅3寸5分（13.3cm）のところに標を付け、そのところにて自分の向こうより手前に丈5分（1.9cm）のところに標をして、幅3寸5分（13.3cm）の間、斜めに標を付ける。

右の端にて、自分の向こうより手前に丈7寸5分（28.4cm）のところに標を付ける。

その所にては、幅をいっぱいにして、肩幅の3寸5分（13.3cm）の所より袖付けの7寸5分（28.4cm）のところまで、図の通り標をする。

肩より1尺1寸（41.7cm）下がった所で、右より左へ幅1寸（3.8cm）のところに標をする。

右の端にて、自分の前より向こうへ股下7寸（26.5cm）の所に標を付け、股下止まりの所では幅をいっぱいにし、袖付け7寸5分（28.4cm）の所より始めて、幅1寸（3.8cm）の標まで形を付け、それより股下7寸（26.5cm）の所まで形を付けて、脇に曲を付け標通りに裁ち切る。

#### 2. 1. 5. 2 後身頃 (図2－第二図)

残り布の中より幅1尺9寸(72cm)、長さ2尺7寸(102.2cm)を1枚取り、中表に幅を2つ折りにする。

第1に左の方にて、自分の向こうより手前に丈3分(1.1cm)取り、次に向こうの端にて左より右に衿肩を2寸(7.6cm)取り斜めに標を付ける。

左の端にて自分の向こうの端より手前に丈1尺(37.9cm)のところに標をする。その所にて左より右に幅1寸(3.8cm)の標をして、丈3分の所から幅1寸(3.8cm)のところまで斜めに標をする。

自分の前より向こうへ股下7寸(26.5cm)の所に標をする。この個所は、幅いっぱいには標を付け、幅1寸(3.8cm)の所より股下7寸(26.5cm)の所まで、少し形を付けて図のとおり標を付ける。

自分の前にて、右より左へ裾口幅6寸5分(24.6cm)取り、股下止まりの所では、幅をいっぱいにして、斜めに標を付ける。

次に右の方に脇の形をつくる。標の付け方は、自分の向こうにて衿肩2寸(7.6cm)の所から、右の方に肩幅を3寸5分(13.3cm)の所に標をする。その個所においては、自分の向こうより手前に丈を1寸(3.8cm)取って、幅3寸5分(13.3cm)の所まで斜めに標を付ける。

袖付けは、肩1寸(3.8cm)取った所より、自分の方に丈7寸(26.5cm)と標をする。その個所では、左より右に幅6寸5分(24.6cm)に標を付け、この標の所まで、肩幅の3寸5分(13.3cm)より図の通り形を付け、次に自分の向こうの端より手前へ、丈1尺1寸(41.7cm)の所に標をする。この個所にて左より右に幅5寸5分(20.8cm)と標をつけ、次に自分の前より向こうへ股下7寸(26.5cm)と標を付け、この個所にては幅いっぱいにして、袖付けより股下止まりの所まで図の通り標をして、その標通り裁断する。

#### 2. 1. 5. 3 袖 (図2－第三図)

残り布の中より幅1尺6寸(60.6cm)長さ1尺4寸(53cm)を取り、幅を2つ折りに切って、中表にして2枚重ね、次に丈を2つ折りにして、布を4枚重ね図のごとく丈の輪を自分の向こうに、裁ち目を前に持って布を平らに下に置き、左の端にては自分の向こう、すなわち丈の輪より裁ち目の方へ、幅4寸3分(16.3cm)取り、次に左より右に幅、2分(0.8cm)ほど入った所で、自分の向こうより手前に4寸(15.2cm)として、4寸3分の所より4寸の所まで斜めに標をする。

次に右の方にて自分の前の所を右より左へ幅2寸(7.6cm)取り袖丈7寸(26.5cm)の中ほどまでにて形をつけ、幅2寸(7.6cm)の所より袖口4寸(15.2cm)まで斜めに標を付けて、残らず標通りに裁ち切る。

#### 2. 1. 5. 4 首の周りにつける切(衿) (図3－第四図)

残り布の中より幅8寸(30.3cm)長さ9寸5分(36.3cm)を1枚取り中表に布を2つ折りにする。幅の輪の所を左に持って、布を平らに下に置き図のごとく、幅の輪の所に自分の向こうより、

手前に丈2寸5分（9.5cm）の所に標を付ける。右の向こうの端は、丈をいっぱいにして、左の端の丈2寸5分（9.5cm）の所より右の端まで図のごとく標を付けて裁ち落とす。

#### 2. 1. 5. 5 裾につける切

残り布の中より、幅2尺（75.8cm）長さ5尺（189.4cm）取る。

#### 2. 1. 5. 6 帯切

幅2寸5分（9.5cm）長さ2尺1寸（79.5cm）を2枚取る。又は、幅5寸（18.9cm）長さ2尺1寸（79.5cm）でもよい。

#### 2. 1. 5. 7 見返し（衿を付けるときの見返し）

斜めの切にて、幅5分（1.9cm）長さ1尺3寸（49.2cm）を1枚取る。

#### 2. 1. 5. 8 毛縁

飾りとして黒毛縁を袖口と衿の周りにつけ、裾には、幅2尺（75.8cm）長さ5尺（189.4cm）の周りに2本付ける。このつけ方として、伸び縮みのできないように、あらかじめ、裏より糊をつけて用いるとよい。

#### 2. 1. 5. 9 紐通し

幅2分（0.8cm）長さ2寸5分（9.5cm）か3寸（11.4cm）の紐を2本紬ける。これを左右の湧き縫いの所に裳の止まり撚り上に、両端を折って表より返し縫で止める。その中に紐を通す。

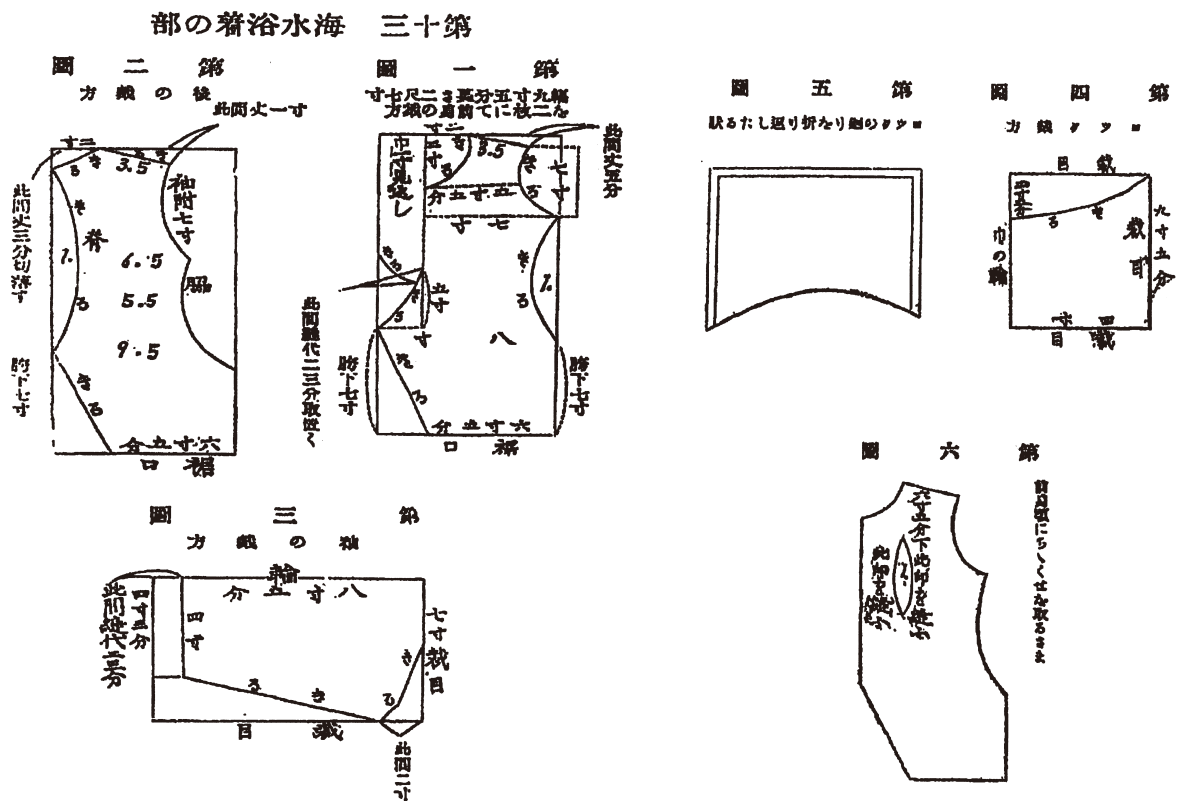


図 2

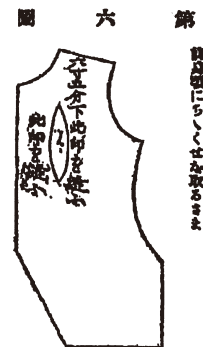


図 3

## 2.2 縫い方

### 2.2.1 袖

袖口を縫い代だけ表の方に折り返し、毛縁を付けて、左右の端を返し縫にし、次に、縁の幅だけ間をおいて1本奥の方に縁を付ける。左右の袖に縁を付ける。

### 2.2.2 衿（図3－第五図）

周りを図のごとく表の方に縫い代だけ折り返した後、左右の隅の所は、毛縁に襷を取って口元に1本つけ周りは左右ともに返し縫いにし、次に幅だけ間を開けて奥の方に又1本つける。

### 2.2.3 後身頃

衿肩を右に持って、股下7寸（26.5cm）の止まりまで返し縫にし、縫い目は、左右に開き縫い込の端を折ってまつりつける。

### 2.2.4 前身頃

股下止まりより股上へ丈5寸（18.9cm）の間返し縫にし、縫い目は左右に開き縫い代の端を折ってまつりつける。それより上の見返しは上前も下前も裏の方に折り返し、見返し幅を上がり8分（3.0cm）位にして、奥の方を仮にしつけ糸で縫い置き、その所に表より仮縫いをし、次に口元の所にも1分（0.4cm）入った所に表より仮縫いをする。

### 2.2.5 前後の身頃

肩幅の3寸5分（13.3cm）の所を合わせて、返し縫いにし縫い目は、左右に開き縫いこみの端を折ってまつりつける。

### 2.2.6 袖付け

次に左右の袖をつけ、縫い目は、袖の方に返してまつりつける。

### 2.2.7 脇縫い

左右の袖下及び脇縫いをする。縫い方は、上前は後身頃を自分の前に持って袖下より裾口まで返し縫いにする。下前は、後身頃を前に持って裾口から袖口の所まで返し縫いにする。縫い目は、左右とも前身頃の方に、袖下は前の方に返し、縫い込の端を折ってまつりつける。

### 2.2.8 股下縫い

前後の股下を揃え、後ろ身頃を自分の前に持って、一方の裾口より一方の裾口まで返し縫にする。縫い目は、前身頃の方に返し、縫い込の端を折って、まつりつける。

### 2.2.9 裾口の縫い

裾口を幅2分5厘（0.95cm）又は3分（1.5cm）にして、これを3つ折りにしてまつる。

### 2.2.10 衿をつける

衿の上に見返し布切を載せて衿丈の真ん中と背縫いとを合わせて、待ち針を刺し、前見返し端より端まで付け、縫い目は、見返しの方に返し、見返しの左右の端を折って、幅で上がり2分（0.8cm）にし、衿に針がかからないように、身頃だけに見返しをまつりつける。

### 2.2.11 乳曲（ダーツ）の取り方（図3－第六図）

前身頃丈に衿肩よりまっすぐに折りを付け、肩より6寸5分（24.6cm）下がった所より縫い始

め、肩より1尺（37.9cm）下がった所で幅5分（1.9cm）の縫い代にて、肩より1尺2寸（45.5cm）下がった所にて縫い消すようにする。縫い目は、縫い代だけ残して裁ち落として左右に開くか、又は、前の方に片返しにする。

#### 2. 2. 12 裳の縫い方

裳の切は幅2尺（75.8cm）丈5尺（189.4cm）の切れである。

裾の紵代を6分（2.3cm）取り、これより1寸8分（6.8cm）上がった所に縁を一本付け、さらに縁の幅だけ間をおいて一本上の方に付ける。裳の切れを輪に縫い、縫い目は片返しにする。縫い込の端を折ってまつり付ける。裾口は、幅3分（1.1cm）ずつ3つ折りにしてまつり付ける。裳を輪にした縫い目の返す方を前とし、裳の丈5尺（189.4cm）を2つ折りにして前後とし、前裳丈の真中を丈3寸5分（13.3cm）切り、その所を幅1分（0.4cm）ずつ3つ折りにしてまつり付ける。

裳の上は幅3分（1.1cm）裏の方に折り返し、その周りに3本のゲン縫いをする。

衿肩より1尺（37.9cm）か1尺5寸（56.8cm）下がった所の前後の身頃だけに、糸を引きしめた裳を返し縫で縫いつける。

裳の3寸5分（13.3cm）切った所に1分（0.4cm）ほど襷を取って、その所に門止めをする。

股上を5寸（18.9cm）縫った止まりにも門止めをする。

#### 2. 2. 13 ボタンかがり

カラーを付けた時の見返しの所に上前に1つ横に孔をあけ、それより2寸（7.6cm）か2寸5分（9.5cm）位ずつ間をおいて横に孔をあけて孔かがりをする。

#### 2. 2. 14 帯をくける

#### 2. 2. 15 紐通し

幅2分（0.8cm）長さ2寸5分（9.5cm）か3寸（11.4cm）の紐を2本紵ける。これを左右の脇縫いの所に裳の止まりより上に、両端を折って表より返し縫いで止める。その中に帯を通す。

#### 2. 2. 16 帯

帯の上前の方へ横に2つ孔をあけ孔かがりをする。下前はボタンをつける。（帯はボタン掛けにせず、幅2寸（7.6cm）長さ5尺（189.4cm）にし着服の際、引きしめるようにすることもある。

#### 2. 2. 17 出来上がり

### 3. 考察

#### 3. 1. 復元用作図

明治43年裁縫教科書『渡邊裁縫講義』には、寸法は鯨尺で掲載されているため単位をcmに変更して作図をした。図4に示す。

作図には型紙という考え方は無く、しるし付けは生地 directly 描くもので、縫い代を含めた作図となっていた。和服を仕立てる時のしるし付けと同様であると感じた。

雛形の形状を見ながら、パターンに修正を加え型紙としたものを図5に示す。

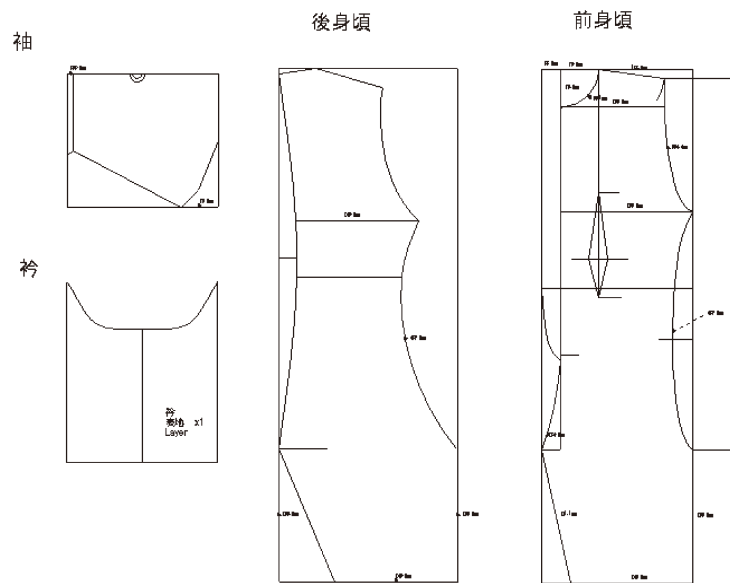


図 4

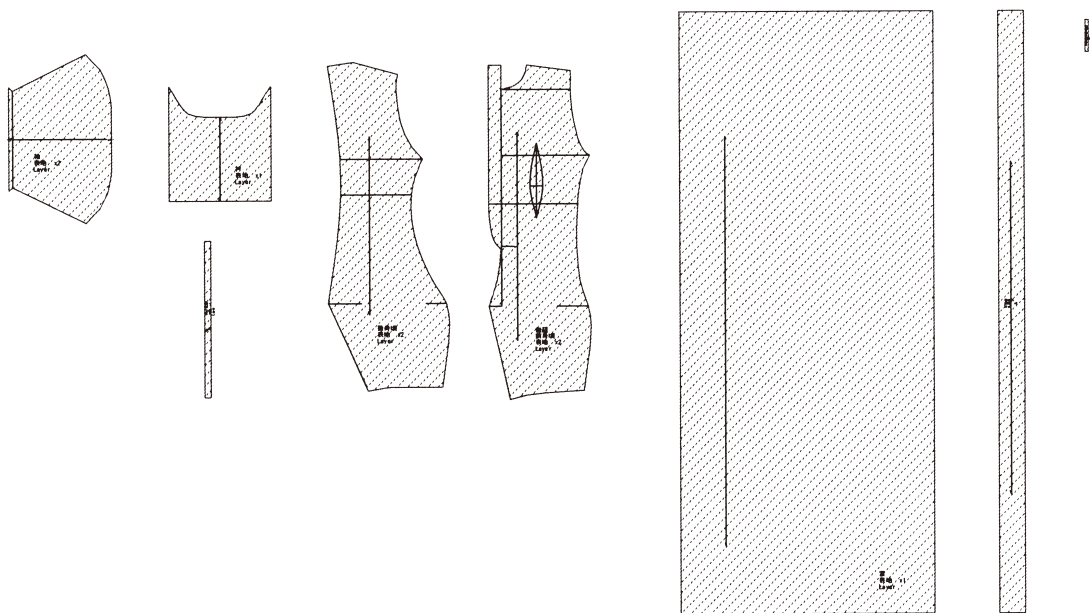


図 5

しかし、教科書に掲載されている海水浴着の作図は、従来の和服の裁断とは、全く異なる衿ぐり、袖山曲線、脇縫いの曲線等を持つパターンとなっていた。男子服のテーラーの一部では、パターン作図法として胸度式、短寸式に近い作図法などが考案（アメリカ、イギリスからの移入）され使用されていたようである。この男子服のテーラーの作図法が取り入れられたものなのかは、推測にすぎない。

しかし、渡邊滋によって、『女児服身頃』として男子服パターンを応用した『原型』に近いパターンが1905年の文部省検定予備試験の解答として1909、1912年に著されている。『原型』という表記が文献で見られるのは1914年からであるので、もっとも早い時期に原型の考え方を導入したと考えられた。

教科書に掲載されている海水浴着の作図は、バランスの悪い図になっているが、本文の解説通りに作図を行った結果、当時の作図法の解説図は、必ずしも縮図の正確さは重要視されていなかったようであることが分かった。

作図は、2本の縫い合わされる曲線が形状も長さも大きく異なって描かれていたり、寸法のバランスも悪く、対称性についても左右対称ではなく不正確な図が描かれていた。理解しやすいように拡大図が、同一の作図の中に描かれているのかと思えるほどであった。

作図方法は、『囲み製図』と言われている方法で作図されていた。この方法は、現在でも簡単な図形を示すために一般に用いられている方法で、垂直、水平の基準線をもとに、各部分の寸法を示してパターンを描くものである<sup>6)</sup>。テキストの文中に『海水浴着であるので、丈と腰回りの太さを知れば良く、洋服のようにきちんと合うのを必要とせず、緩やかに仕立てる。』と記載されていたが、女性用には、『乳くせ』と書かれたダーツも取られていて、女性の立体的な構造を理解しての形状となっていた。

### 3.2 復元用縫製

明治後期に作成された雛形の中には、一部ミシン縫いが導入されていた。海水浴着は、ブレード（毛縁）を付ける所にミシン縫いが使用されていたので、実物大の海水浴着を製作する時にも、地縫いとブレードをつける所は、ミシン縫いとした。教科書には、ブレードのつけ方として、『伸び縮みのできないように、あらかじめ、裏より糊をつけて用いるとよい。』と記載されており、丁寧に綺麗に縫う方法まで指示されていた。この方法は、裏側に薄く糊をつけて、アイロンで抑えることによって曲がらずに美しくつけられるという方法である。現在では、接着糊のついたブレードも販売されているが、明治時代にこのような、詳細な教育内容によって授業が行われていたことは、大きな驚きであった。

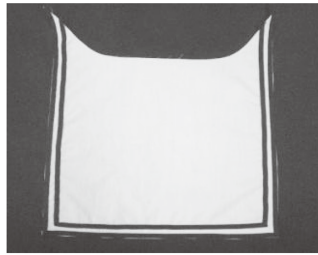
縫い代の始末は、すべてまつり縫いで行った。1845年にアメリカでミシンが開発されていたが、雛形教育の中にミシン縫いが導入されたのは、また、早い時期であったことがわかった。縫製については、雛形を参考にすることが多く、教科書の解説だけでは、理解できないところが多くあった。渡邊辰五郎は、一斉授業を行う際に掛け図を用いることも考案されたと聞いているので詳細に書かれた掛け図があったものと考えられた。製作の過程を写真4に示す。  
雛形の写真を写真5に、実物大の海水浴着を写真6に示す。

## 4. まとめ

現代では、世界の情報はいつでもどこからでも得ることができるが、明治時代のころは、情報を



袖



衿



ギャザースカート



後身頃



前身頃〈開き〉



前身頃（女子）

写真 4



男子雛形水着



女子雛形水着



男子水着



女子水着

写真 5（東京家政大学博物館所蔵）

写真 6

得るということは困難だったと思われる。しかし、1900年（明治33年）に渡邊辰五郎は、長男の滋をアメリカの裁縫学校に留学させている。知識、技術の情報を得て持ち帰らせ、早い時期に洋服文化を取り入れようとしたことがうかがえた。日本の洋服文化への移行を予測して、積極的に洋裁教育を導入したと考えられた。

独創の積もり方算式を駆使した、裁縫教科書は我が国最初のものであったようである。渡邊辰五郎は近代日本教育者13人のうちの一人であり、女子教育の先駆者であることに誇りを覚えた。

又、大学の改革が求められている今日、渡邊辰五郎の原点の教育について振り返ることができたのは、有意義であった。

## 謝辞

海水浴着製作にあたり、いろいろとご助言をいただきました東京家政大学博物館・学芸員の三友晶子様に心から感謝申し上げます。また、企画展に参加させていただく機会を与えて下さいました大磯町郷土資料館の学芸員、山口由紀子様と曾根田貴子様に心から感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 大磯町郷土資料館；図録『元祖海水浴場・大磯』, 2010, pp.2-3.
- 2) ベバリー・パークス, 南目美輝；スポーツウェアの革命, 島根県立石見美術館, 2006, p.10,12,156.
- 3) 渡邊滋；渡邊裁縫講義 高等部, 東京, 東京裁縫女学校出版部, 1910, pp.354-365.
- 4) 畔柳昭雄；海水浴と日本人, 東京, 中央公論新社, 2010, p.43, 197-199, 201.
- 5) C.M. キャラシベッタ；ファッション辞典, 東京, (株) 鎌倉書房, 1992, p.511.
- 6) 三吉満智子；日本繊維製品消費科学会誌, 45, 2004, p.273-274.

